

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第21回 全国大会プログラム

日時：2021年11月20日（土） 10:00～17:00

場所：同志社大学 新町キャンパス 尋真館（オンライン Zoom 併用）*

*今後の感染状況等によっては、実施形態が変更になる場合があります。最新の情報は学会ホームページでご確認ください。

★受付 尋真館2階 9時30分より

★研究発表（10:00～11:35）

	第一室（尋真館3階30）	第二室（尋真館3階31）
10:00～ 10:45	司会：京都ノートルダム女子大学 木島 菜菜子 1. J. W. ウォーターハウス 《シャロットの姫》 三部作にみる女性観の変遷 新潟大学(院) 小林 聡子	司会：奈良女子大学 市川 千恵子 1. サッカレーの『コックスの日記』における女性 性の問題—「手」と「語り」が示すもの 東京大学(院) 岡本 佳奈
10:50～ 11:35	2. John Everett Millais and Martha Combe: Redefining the nature of the artist-patron relationship 国立西洋美術館(研究員) 浅野 菜緒子	2. Mrs. Warren の家庭経営術 — 語りの虚構 と現実 名古屋女子大学 山田 千聡

★シンポジウム（12:30～15:00） 尋真館2階20

Ballets Russes — ロマン主義からモダニズムへの変革

司会・報告・バレエ：同志社大学
報告：近畿大学
報告・ダンス：神戸大学
バレエ（ゲストダンサー）

桐山 恵子
阪本 洋三
関 典子
若林 絵美

★特別講演（15:15～16:30） 尋真館2階20

司会：立命館大学 金山 亮太
“The very top of the musical tree”: Changing Ideas of Grand Opera in Victorian Britain
同志社大学 David Chandler

★総会（16:40～17:00）

司会：同志社大学 玉井 史絵

【研究発表】

（第一室）

1. J. W. ウォーターハウス 《シャロットの姫》 三部作にみる女性観の変遷

新潟大学(院) 小林 聡子

J. W. ウォーターハウスは19-20世紀にイギリスで活動した画家であり、その作品のほとんどが女性を中心に描いたものである。ウォーターハウスは、A.テニソンの『シャロットの姫』を主題として3点の油

彩画を制作したが（1888、1894、1915年）、制作年に約30年の開きがあるこの3点では女性の描かれ方が変化している。しかし画家自身の女性観やその変遷についての指摘はなされていない。

本発表では3作目完成までの制作過程における画家の女性観の変遷を明らかにする。発表者は、3点の油彩画に加え、3作目制作のために15年以上に渡って描かれた十以上の構想画にも画家の女性観が窺えると考え、これらの構想画も分析対象とした。その結果、特に2作目から3作目制作の間、つまり3作目の構想過程で主人公の表現方法が大きく変化していく様子が確認できた。発表では、作品とりわけ構想画の分析を通して、世紀末から20世紀初頭のイギリス社会の転換期にウォーターハウスの女性観が大きく揺れ動いていたことを明らかにする。

2. John Everett Millais and Martha Combe: Redefining the nature of the artist-patron relationship

国立西洋美術館(研究員) 浅野 菜緒子

This paper will explore the relationship between John Everett Millais (1829-96) and one of his earliest patrons, Martha Howell Bennett Combe (1806-93). Together with her husband, Thomas Combe, Superintendent of the Clarendon Press at Oxford University, she became a strong supporter of the young Pre-Raphaelites and their associates including Millais, William Holman Hunt and Charles Allston Collins. Not only as an avid patron of his art but also as a reliable friend, Martha became an integral part of Millais' early career, occasionally providing both mental and physical support. While her involvement in the artistic community and patronage was at an equivalent or even higher degree to those of her male counterparts, Martha's commitment to sustain the young artists and to build the Combes' art collection has long been overshadowed by that of her husband as is often the case for female sponsors of Victorian artists. Particularly focusing on the early period of the artist's career from the late-1840s to the 1850s, this paper will uncover the nature of Millais and Martha Combe's relationship by examining her role and involvement in his art-making, and will attempt to redefine her contribution to the art of Millais and his fellow artists.

(第二室)

1. サッカレーの『コックスの日記』における女性性の問題—「手」と「語り」が示すもの

東京大学(院) 岡本佳奈

ウィリアム・メイクピース・サッカレーの『コックスの日記』(1840)は、突然の階級上昇を経験する床屋のコックスとその家族が上流社会で失敗を繰り返した後、本来の居場所に回帰するという一年間の騒動を描いた滑稽譚である。本作は、主人公の虚栄心によって生じた問題が容易に解決されるというサッカレー作品に不似合いなハッピーエンドゆえに、その評価は芳しくない。本発表は、本作における手の表象に着目し、一家の階級変動に対し妻ジェマイマと娘ジェミマランが家庭において果たす役割を明らかにすることで、作品の再考察を行う。さらに、作品の骨子であるコックスの語りを分析し、女性たちに付された役割をコックスが無意識に利用している構造を検討する。コックスの男性中心的な視点が批判的に読者へ提示されている可能性を考察し、本作がヴィクトリア朝的家庭主義への諷刺性を孕んだ作品であることを提示する。また、1840年代のイギリスにおいて諷刺雑誌が置かれた状況と本作の創作背景を分析することで、本作の意義を表象、諷刺、社会状況という三つの視座から文化論として吟味する。

2. Mrs. Warren の家庭経営術—語りの虚構と現実

名古屋女子大学 山田千聡

Eliza Warren Francis (1810-1900) は、Beeton 夫妻の *The Englishwoman's Domestic Magazine* (1852-79) のライバル誌であったミドルクラスの女性向け雑誌 *The Ladies' Treasury* (1857-1895) の編著者であった。彼女は Mrs. Warren などのペンネームで数々の指南書を執筆したが、それらの抄訳の存在と同じく、その名は日本で広く知れ渡っていない。夫の助けがあった Mrs. Beeton とは対照的に、二度夫を亡くした彼女は、寄宿舎を営みながら執筆活動を続けて生計を立てた。苦労を重ねた彼女の代表的な作品にみられる特徴は、当時続々と出版された指南書の慣習的な記述方法から逸脱し、作中の登場人物に自らの体験を重ね合わせ、家庭経営術を語らせている点にある。本発表は、Mrs. Warren の *How I Managed My House on Two Hundred Pounds a Year* (1864)等の作品より、虚構と現実のはざままで揺れ動く自叙的な語りの内容を分析す

る。彼女が物語の虚構性を利用し、ミドルクラスの主婦に求められた家庭性や女性性をいかに読者と共有しようと試みたのか、他の指南書との比較も行いながら明らかにしたい。

【シンポジウム】

Ballets Russes — ロマン主義からモダニズムへの変革

ヴィクトリア朝のバレリーナたち——トウシューズの妖精と裸足のサロメ」
同志社大学 桐山 恵子

バレエ・インプレサリオ、ディアギレフの模索
——モダニズムとポスト・アリストクラシー時代のパトロネージ
近畿大学 阪本 洋三

Zoom で観るバレエ・リュス——薄井憲二バレエ・コレクションを中心に
神戸大学 関 典子

1909年にパリで旗揚げ、1911年にはジョージ5世戴冠記念という冠つきでロンドン公演を行ったバレエ・リュスは、バレエをお気楽な娯楽と見かだしていた当時の観客を驚きと興奮の渦に巻きこみ、興行主ディアギレフの言葉を借りるなら「一夜にして世界を征服した」。既存のバレエ概念を覆したリュスの舞台は、ブルームズベリー・グループの面々が天才ダンサーのニジンスキーたちを見るために、連日コヴェント・ガーデンに足を運んだことから明らかなように、人々に舞踊におけるモダニズムの到来を告げたのである。

シンポジウムでは、まずヴィクトリア朝前期に興隆したロマンティック・バレエから異国情緒あふれる世紀末ダンスへの変遷を考察する。ついで貴族趣味的だったバレエにモダニズムの美学を融合させることにより、ディアギレフが近代市民社会でいかにリュスを経営していったのか、その手腕を探る。さらに戦前からバレエを学び東京大学へ入学、シベリア拘留の苦難を乗り越え、その後もダンサーそして舞踊研究者としてバレエ界を牽引した薄井憲二氏によるバレエ・コレクション（兵庫県立芸術文化センター所蔵）から貴重な資料を用いつつ、知られざるバレエ・リュスの革新性に迫っていく。

また桐山・若林によるロマンティック・バレエの衣装およびトウシューズの紹介と実演、プロダンサーでもある関による本シンポジウムのために特別制作されたコンテンポラリー・ダンス映像の初放映も行う。プロデューサーとしてニューヨーク・シティ・バレエ団と関わってきた阪本によるリアルな声もお届けし、躍動感あるシンポジウムとしたい。

【特別講演】

司会：立命館大学 金山 亮太

“The very top of the musical tree”: Changing Ideas of Grand Opera in Victorian Britain

同志社大学 David Chandler

Nearly all theatre in Victorian Britain included music, but at “the very top of the musical tree” was the idea of “grand opera.” Strangely, there was no clear, agreed definition of what grand opera was, but in general terms it was opera deriving from the Continental European traditions of opera, and therefore outside the English tradition of “dramas with songs.” It generally required larger, more expensive musical forces, meaning it was always running into financial difficulties, despite its cultural prestige. The idea of grand opera significantly shifted through the Victorian period, first because the Italian, German and French traditions of opera influencing it were rapidly evolving in these decades; and second because the great success of more popular forms of musical theatre in Britain reduced the audience for grand opera.

I want to discuss the shifting culture around English language grand opera by focusing on five paradigmatic musical and theatrical careers: G. Herbert Rodwell (1800–52); Michael William Balfe (1808–70); George Alexander Macfarren (1813–87); Arthur Sullivan (1842–1900); and Frederick Corder (1852–1932). Rodwell represents the tension between the English opera tradition and grand opera, and the frustrations of British composers, at the dawn of the Victorian period. Balfe represents the great success of an Italian-influenced idea of grand opera in Britain from 1835 onwards (what is generally called “English Romantic opera”). Macfarren represents the desire to synthesise the English opera and folksong traditions with grand opera to produce a more thoroughly national style of musical theatre. Sullivan, Macfarren’s heir in some respects, represents the great difficulty facing more serious opera after the enormous success of English comic opera, or operetta, from the 1870s onwards. Corder, the first British composer to be strongly influenced by Richard Wagner, represents an epochal movement of grand opera away from commercial theatre and into the realm of “art music.” Musical extracts from all these composers will be included in the talk.

会場へのアクセス

地下鉄烏丸線	「今出川」駅から徒歩 10 分
京阪電車	「出町柳」駅から徒歩 25 分
バス停	「上京区総合庁舎前」から徒歩 3 分



* 地下鉄「今出川」から今出川通りを西に進んで、新町今出川の交差点から新町通りを北に進んでください。
 (近隣住民の方々のご迷惑になりますので、これ以外の細い道を通るルートは避けてください。)

会場案内

- *新町キャンパスにはカフェテリアがあり、土曜日にも営業しております。また、周辺にはいくつかの食堂、レストランがあります。
- *当日は会場内での密を避けるため、書籍展示や休憩室での茶菓子の提供はいたしません。飲み物は各自でご持参いただくようお願いいたします。
- *会場で飲食をされる際は、周りの方との会話はお控えください。また、飲食をされる以外のときは、必ずマスクを着用してください。会場では、常に周りの方々と適度な距離を保ってくださいますよう、お願いいたします。
- *会場では、必ず○印のシールのある座席に着席いただきますよう、お願いいたします。

○感染症予防対策へのご協力をお願い

1. 発熱や体調の不良等がある方は、ご来場を控えていただきますよう、お願いいたします。
 2. ご来場の際には、マスク着用、アルコール消毒液による手指消毒、手洗い、周りの方々と適度の距離を保つなど、感染症予防にご協力くださいますよう、お願いいたします。
 3. 当日、対面での全国大会への参加を希望される方は、事前にウェブにて参加申し込みをし、当日は必ず受付を済ませてください。取得した個人情報は厳重に管理し、新型コロナウイルス感染拡大防止以外の目的では使用いたしません。
 4. 会場での検温にご協力をお願いいたします。
- ※今後の感染状況等によって、対応が変更になる場合があります。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：〒610-0394 京田辺市多々羅 1-3

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部

玉井史絵研究室内

Tel: 0774-65-7223

E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com